

都筑民家園茶室の見どころ



外部仕様

外部仕様

屋根材は現代の不燃屋根材アスファルトシングルを8cm間隔で葺き、
 桧皮葺に似せた仕上げにしています。
 外壁についてもジョリパットという現代の塗り壁材を使っていますが、
 基材の中に藁スサを入れ土壁風に仕上げています。広間の内壁も外壁
 と同じ材料ですが藁スサの細かさや長さを変えて異なる表情に仕上
 げています。
 土庇(つちびさし)・どびさし:池の方に柱を建てて張り出した庇)の外回り
 の柱は捨て柱といいますが、主屋に合わせスギ材を使用しています。(建
 物本体の柱はヒノキ)



扁額

扁額は、建物の表札にあたるものです。
 広間の名称「輪亭(りんてい)」は公募の中から選定され、民家園が大
 切にする人のつながり、人の輪(和)を意味しています。
 広間の扁額は茶室を贈る有志の会代表齋藤勝廣師の筆により、茶室
 の建具を作っていた大磯の古瀬さんに彫っていただきました。



雨戸の軸廻し

雨戸の手法として軸廻しがあります。南と西二面の雨戸が1箇所
 に納まります。鹿児島知覧の武家屋敷などでは時々雨戸を収納する実演
 を行っているようです。

雨戸の廻しの手法
 として上下に金物
 をつける方法もあ
 りますが、この金
 物が今では手に入
 らないため、今回
 は棒を上下に渡す
 手法を採っています。
 四国高松の栗林公
 園内の茶室 掬月亭
 (きくげつてい)を参
 考にしています。



みがき丸太

小間の外側のさび丸太など杉材は吉野にて求めました。
 このような丸太数万本の材の中から選んでいます。



このような曲がった「あて」と呼ばれる材もきれいに仕上げ、軒のほおづえ
 に使っています。



材木を求めて

主要な材はヒノキです。静岡の天
 竜にて求めました。

天竜の製材所
 鴨居、敷居等の内法(うちのり)は
 吉野材認定の吉野檜

内法(うちのり):建築の世界で内法と
 いった場合には構造材の内側のさし
 わたし寸法をいい、この間につけら
 れる敷居や鴨居を内法(内法材)と呼
 びます。



吉野の貯木場
 吉野杉は少しピンクかかった色味
 が特徴です。
 吉野はスギもヒノキも最高のもの
 があります。



外露地(そとろじ)

主屋の腰掛から茶室への飛石は茶味のある筑波石を畳石の形で
 配置。侘びたたたずまいにしています。
 主屋の縁台を腰掛待合に見立てています。
 腰掛から内露地へは畳石を進みます。



茶室前のピオトープ池

春のサクラ、秋のモミジを配し四季の彩りを演出します。
 また、近郷で見ることができた水生植物を植栽し、地域の植生を再
 現しています。
 池の整備は都筑民家園のボランティアグループに近隣の方々にも
 参加して頂きまち普請で行いました。



輪亭(りんてい)の内露地

飛石は神奈川県内で産出する根府川石(ねぶかわいし)と丹沢山
 系の川石を使っています。
 蹲踞(つくばい)は近隣の方からいただいた古い石臼を利用しています。



根府川石(ねぶかわいし):小田原市根府川・米神間に分布する溶岩流で、板状
 節理(ばんじょうせつり)が極めて良く発達しています。

鶴雲菴(かくうんあん)の内露地

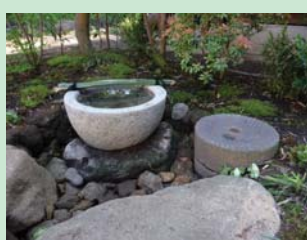
畳石の延長で小間に向かう飛石は筑波石を配しています。
 枝折り戸(しおりど)を通り小間の内露地へ



北側に配した穂垣(ほがき)(大徳寺穂垣(だいとくじほがき))の割竹は
 民家園の竹を活用しています。



小間の蹲踞(つくばい)は石臼をい
 ただいできました。蹲踞(つくばい)
 周りには挽き臼を湯桶石(ゆおけい
 し)として配しています。



へぎ板のつくりかた

小間の天井は木曽のねずこと言う材を裂いて作っています。
 木曽でへぎ板づくりの職人は3人。そのお一人、小林鶴三さん。
 松本棟梁が仕事場を訪ねました。



①目がつまった天然のネズコを丸
 太にし、ミカン割り(縦に割る)にし
 ます。ミカン割りしたものから、へ
 ぎ板を32枚取れる幅にします。両
 足で木を押さえながら、鉋(な
 た)を立てて小槌(こづち)で叩き、
 32枚の板が取れるように木取り。

木取り(きどり):原木丸太から建築材
 を挽く場合に、どの位置でどのよ
 うな部材を取るかを決めていくこ
 と。

②左足の押さえ加減を調節なが
 ら、薄く裂く「へぎ」の工程にはい
 ります。この工程では刃物は使
 いません。

③「へぐ」と、木の木目(もくめ)が
 内側から現れます。同時に、ネズ
 コの香りが工房じゅうに広がります。
 「へぐ」時、木の繊維がやさしくは
 がれていくようなサリサリという音
 も聞こえてきます。

(※製作過程の説明は「いなまいニュー
 スタジオ」伊那毎日新聞社のサイ
 トを参考にさせていただきます)



輪亭

輪亭(りんてい)

広間
 畳のサイズには京間と江戸間があります。京間の八畳と江戸間の八畳では約2㎡の違いが出ます。茶の基本は京間ですが、建物全体のボリュームを押さえたい事もあり、江戸間の畳を基本とし、手前畳のみを京間巾寸法といたしました。

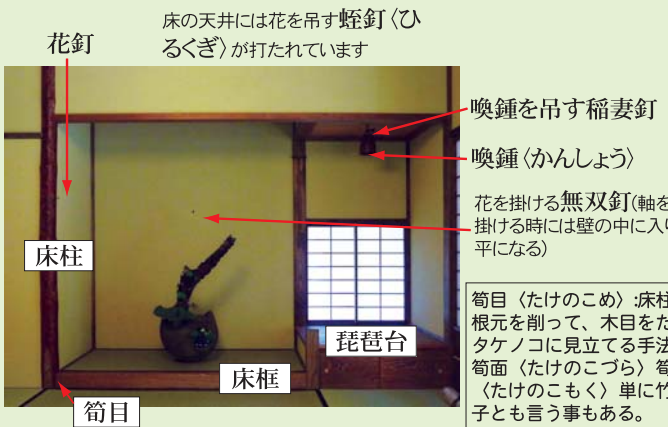


多目的に使用できるように襖を水屋奥に移動できるようにしており、開け放つと十二畳大になります。



この襖を取り外す

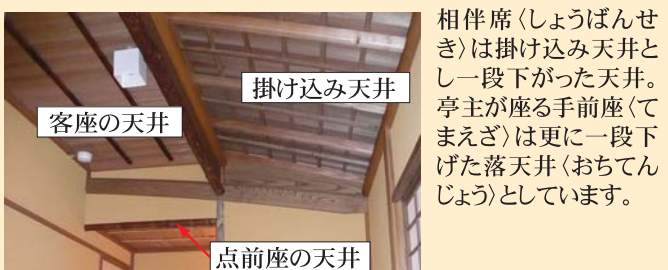
広間の床の間
 床柱はアカマツの皮付丸太。床框(とこがまち)は栗。広間の床には琵琶台が付いています。これは昔琵琶を飾ったところからこの名があります。この板はアカマツの1枚板ですがこれは新潟で求めました。



喚鐘(かんしょう)
 茶室の床の間には、いろいろな釘が打たれていますが、琵琶台の天井には、喚鐘を吊すための釘が打たれています。喚鐘は小さな釣鐘で正式な茶事で中立(なかだち)のあと濃茶の準備ができたことを知らせるために打ちます。



鶴雲庵の天井
 小間の天井は高さに変化を加え、空間が広く見える工夫をしています。座の性質により高さを変え、正客が座る床の間の客座は、天井を一番高く作っています。板材も規格のそろった一番良いものを使った竿縁天井(さおぶちてんじょう)。



平天井(ひらてんじょう)はへぎ板と言ってまだ道具が無かった時代のやり方で、手で板に裂いています。へぎ板の材は木曾のねずこ(黒部杉-ヒノキ科ネズコ)と言う材(天然の材でないと裂けないと言われています。)で棟梁が木曾に出向き調達してきたそうです。床前はサイズの揃ったものですが、手前座の天井は半端物を貼っています。天井板を止めている竹は箭竹(やたけ)(矢竹、弓矢の矢にする竹)を使っていますが、これも床前が煤竹(すすたけ)、点前畳の天井の竹はさらし竹になっています。



平面計画

本茶室は、伝統工法に準拠した数寄屋造りにより建築されています。

輪亭(りんてい)
 八畳の広間は琵琶台を備えた床が付属しており表千家茶室・松風楼に似た形になっています。

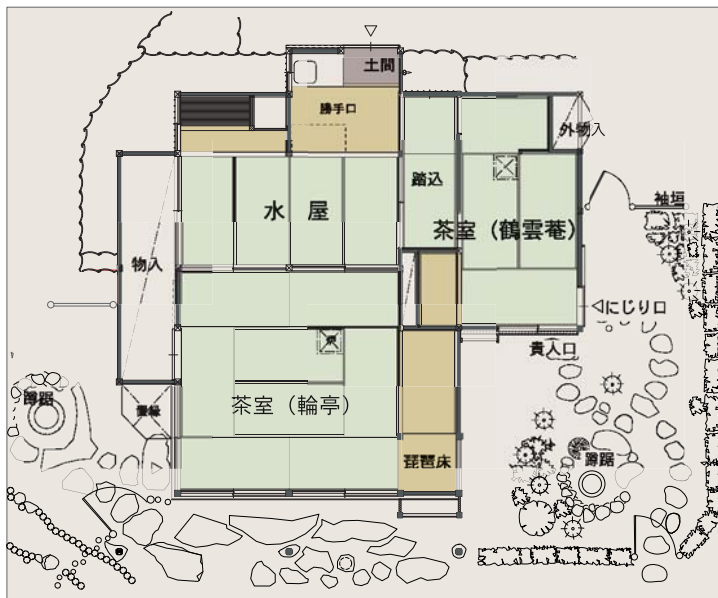
鶴雲庵(かくうんあん)
 三畳台目の小間は桂離宮の松琴亭(しょうきんてい)や曼殊院(まんじゅいん)の八窓軒(はっそうけん)に近い形になっています。

その他四畳大の水屋、一畳半の踏込などで構成されています。

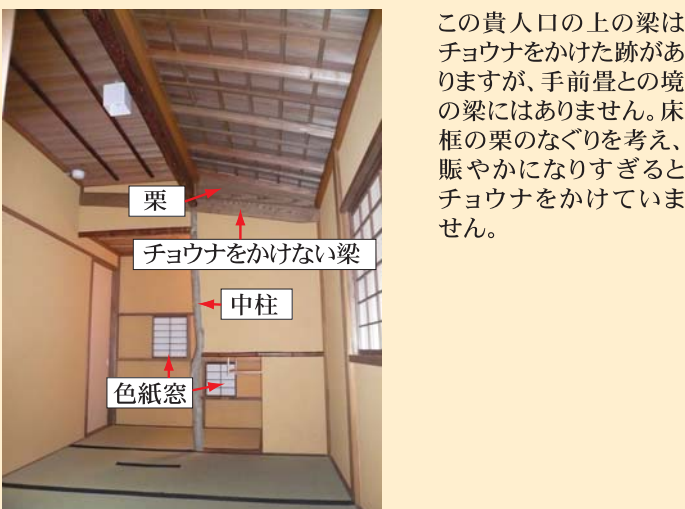
三畳台目(台目)
三畳に台目畳を加えた部屋
台目畳(だいめたたみ)
道具畳(手前畳とも言う)が一畳の四分の一ほど短い畳です。
台子(だいす)の地板の幅ほど短い畳で、侘寂(わびさび)を求めた茶人に好まれます。
台子(だいす)
茶道の点前に用いる茶道具で、水指などの茶道具を置くための棚物の一種。

「珠光 紹鴎 時代之書」
 〈じゅこうじょうおうじだいのしょ〉

座敷の様子
 異風になく 結構になく
 さすがに手ぎわよく
 めにたたぬ様よし



造作(ぞうさく)
 鶴雲庵は三畳台目の席です。通常の畳3枚分に奥の点前をする畳一点前畳の長さが通常より短く(おおよそ3/4の大きさ)台目畳と言います。この小間は京間で皆さんが日常接する江戸間より広く、幅が95cm強あります。この小間は棟梁の工夫により特有の造作になっています。茶室内に梁が2本見えます。貴人口の上と点前畳との境の上です。



壁の一部は栗の板です。この斜めの天井は掛け込み天井といいいます。その留めにある壁も栗の板です。壁留めに赤松が使われています。正面にある中柱は香節(こぶし)です。中柱の両側のいぶし竹もバランスが良く、取り合いがうまくいっています。床柱が赤松の皮付き丸太に筍目(たけのこめ)をつけています。主張しすぎず、適度な侘びを感じられる空間になっています。

にじり口
 利休が蹲踞(つくばい)と共に発案したと言われるにじり口が主屋側の窓の下にあります。蹲踞(つくばい)もにじり口も蹲(つくぼう)姿勢となり、謙虚さを形として表しています。世間で持たれる名や格式を忘れ、語り合う一時を過ごしましょうということでしょうか。



にじり口の板の貼り方は2枚半を使う決まりになっています。これは利休時代の不要な雨戸を切り落として作ったとの事からこのようになっています。板と板の継ぎ目には細かな竹ひごでつないであります。建具屋さんの知恵による板のそり止めのための工夫です。

貴人口(きにんぐち)
 池側の出入口は貴人口と言ひ、身分の高い人のために工夫されたことですが、現代の私たちは背が高く、蹴り口が窮屈すぎる人もいます。蹴り口を使えない人のためであるとも言えます。無理して蹴り口から入らなくてもかがんで貴人口から入っても良いと思います。この小間は室内から露地、庭の切り取られた景色を眺めてゆったりした時間を過ごして貰いたいと池側に貴人口を設けています。



小間の貴人口と連子窓の障子は茶室では良く行う手法ですが石垣貼りにしています。

鶴雲庵

鶴雲庵(かくうんあん)

小間の床の間
 にじり口から入って最初に拝見するのが床の間です。そこにその日の亭主の考えたテーマがあります。このようににじり口の正面に床の間を設えるのが定石の一つですが、平面も茶事の流れから決まります。床前がお客様の席です。話しやすいのは相対する位置ですから亭主のいる点前畳が自然と奥に決まります。



茶を点てるために水屋から入ってくるのが茶道口です。通常の出入口より背の低い出入口です。道具などを持って入ってきます。茶室では謙虚な姿勢で物事を進めます。床の脇にあるのがにじり口の次に背の低い給仕口です。菓子や懐石などを給仕します。

